



©酒井広司
白糠・縫別 1999年「北海道の旅」シリーズより

特別作家賞
酒井広司 (さかい ひろし) 氏
1960 (昭和35) 年、後志管内余市町生まれ。1980 (同55) 年、東京工芸大学短期大学部写真技術科卒業。札幌大谷大学美術学科非常勤講師。東京工芸大主催の第1回フォックス・タルボット賞 (1979年)。作品「夏の消失点」が写大ギャラリー收藏。札幌市内スタジオ勤務を経て、1992 (平成4) 年、グレイトーンフォトグラフィ (有) 設立。1984

リン市在住。1994 (平成6) 年、日本大学芸術学部写真学科卒業。第5回写真ひとづば展グランプリ受賞 (1995年) の「創造の記録」、写真新世紀年間グランプリ受賞 (1996年) の「潜る人」、同賞受賞作家展で発表した「フジヤマ」など、独特の距離感と完成度の高い作風で早い時期から注目を浴びる。想像力と被写体が出合う場を求めて海底や世界各地、宇宙へと身体的、精神的な移動と飛躍を重ねる中で撮影された光景は、幻想的で未知な世界を示している。近作ではピンホールカメラやシルクスクリーンを使った作品なども手掛け、既成の枠にとられない写真表現の可能性を問いかける作品を制作している。1997 (同9) 年に東川町内で個展「鳥を見る」(ひがしかわアートギャラリー) 及びグループ展を開催。1998 (同10) 年、アジア・カルチュラル・カウンシルの個人フェローシップによってアメリカ・ニューヨーク市に滞在。1999 (同11) 年、ライクスタアカデ

ミ (オランダ・アムステルダム市) にゲストアーティストとして招へいされる。2002 (同14) 年、芸術選奨文部科学大臣新人賞 (美術部門)。2005 (同17) 年、ポーラ美術財団在外研修員としてドイツ及び東アフリカで研修。国内外での展覧会多数。主な個展に「予感」(2001年丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)、「飛ぶ夢を見た」(2004年原美術館)、「光は未来に届く」(2011〜2012年/Izu Photo Museum) など。

を発行。水河、パイプライン、ゴールドラッシュなどをモチーフに、世界各地で独自の視点からランドスケープを撮影している。

(昭和59) 年から個展、グループ展で継続的に作品の発表を続け、NPO (特定非営利活動) 法人・北海道を発信する写真家ネットワークの会員として活動。1994 (平成6) 年から始めたシリーズ「Sight Seeing」(後に「偶景」に改題) は、北海道として思い浮かぶ典型的景観を排したアノニマスな風景をとらえた。タイトルには、撮影した時と場所 (北緯、東経) を示す21桁の数字が用いられている。北海道の各地でたまたま出合った光と場所で、風景が自らを開示する「沈黙の空間」「風景の原型」を写真に収めようとしている。2009 (同21) 年、CAI02ギャラリー (札幌) で同シリーズ個展を開催。並行して撮影しているシリーズ「そこに立つもの」は、昭和時代の木造住宅、農家の納屋、サイロ、小さな公民館など無名の建築物を撮影している。北海道の時代の記録であり、忘れられたように佇む建築が静ひつながらも強じんな存在感をたたえている。ほかに北海道の各地をカラーでスナップしたシリーズ「北海道の旅」など、北海道の風景をいかに写し取るかということを一貫して追求している。

村 (現揖斐川町) 戸生まれ。2006 (平成18) 年、88歳で逝去。戦争で夫を亡くした後、農業のかたわら民宿を営みながら徳山村で暮らす。1957 (昭和32) 年、徳山ダム計画が立ち上がり、村の記録を残したい気持ちからテープレコーダーで村の行事や生活音の録音を始める。ダム計画が本格化する中、1977 (同52) 年、村民運動会で写真を撮影して以降、通称ピッカリコニカ (当時のコンパクトフィルムカメラ) での撮影に年金を注ぎ込み、「カメラばあちゃん」の愛称で親しまれる。1983 (同58) 年、徳山村を舞台にした映画「ふるさと」(神山征二郎監督) に協力し、最後の場面にも出演。最初の写真集「故郷―私の徳山村写真日記」(じゃこめてい出版、1983年) を出版。1985 (同60) 年離村を余儀なくされ岐阜市内に転居。1987 (同62) 年の廃村後も村に通い、亡くなるまで故郷の人々、自然、建物、祭り、風習などを撮り続けた。その数は約10万カットのネガと600冊のアルバムにのぼる。同年9月徳山ダム試験たん水が始まり、旧徳山村跡地が水没。2008 (平成20) 年、計画から半世紀を経て徳山ダムが完成し、増山の写真は村の姿をとどめるかけがえのない記録とな

った。1984 (昭和59) 年、エイボン功績賞。写真集「ありがと徳山村」(影書房、1987年)、「増山たづ子 徳山村写真全記録」(同、1997年) など。没後も日本各地で写真展が開催され、近年では「増山たづ子 すべて写真になる日まで」(Izu Photo Museum、2013/2014年) がある。(以上、写真の町東川賞審査委員会、佐藤時啓氏の講評から)



©増山たづ子
鯉のぼりと子供 1981年5月1日

国内作家賞
野口里佳 (のぐち りか) 氏
1971 (昭和46) 年、埼玉県大宮市 (現さいたま市) 生まれ。ドイツ・ベル



©野口里佳
手と虹 Hand and Rainbow, 2010

リン市在住。1994 (平成6) 年、日本大学芸術学部写真学科卒業。第5回写真ひとづば展グランプリ受賞 (1995年) の「創造の記録」、写真新世紀年間グランプリ受賞 (1996年) の「潜る人」、同賞受賞作家展で発表した「フジヤマ」など、独特の距離感と完成度の高い作風で早い時期から注目を浴びる。想像力と被写体が出合う場を求めて海底や世界各地、宇宙へと身体的、精神的な移動と飛躍を重ねる中で撮影された光景は、幻想的で未知な世界を示している。近作ではピンホールカメラやシルクスクリーンを使った作品なども手掛け、既成の枠にとられない写真表現の可能性を問いかける作品を制作している。1997 (同9) 年に東川町内で個展「鳥を見る」(ひがしかわアートギャラリー) 及びグループ展を開催。1998 (同10) 年、アジア・カルチュラル・カウンシルの個人フェローシップによってアメリカ・ニューヨーク市に滞在。1999 (同11) 年、ライクスタアカデ

新人作家賞
石塚元太良 (いしづか げんたろう) 氏
1977 (昭和52) 年、東京都出身。2011 (平成23) 年、文化庁在外芸術家派遣員。2012 (同24) 年、ポーラ文化財団芸術館派遣員。19歳からスリランカ、ドイツ、アラスカなど約70カ国を旅しながら撮影する。バックパッカーでアフリカ、アジアを縦断しながら撮影した「WorldWideWonderful」で1999 (同11) 年、エプソンカラーイメージングコンテスト大賞。世界を東西から2周し、わずかな時間差でとられた縦位置の写真一枚を見開きに収めた「worldwidewarp」で2002 (同14) 年、ヴィジュアルフォトアワード一般部門大賞、日本写真家協会新人賞を受賞。



©石塚元太良
PIPELINE ICELAND #1, 2012